

「仰げば尊し、わが師の恩」

東京警察病院顧問
天翁会あい介護老人保健施設長
真柳 佳昭

佐野圭司先生は 1962 年、史上最年少の若さで東京大学医学部教授に就任され、M3 クラスの私達に脳神経外科学の講義を始められた。講義はいつも明快で格調高く、忽ち魅了されてしまった。私が最も感動したのは「側頭葉てんかんの症候学」だった。「側頭葉は多くの機能系の複合体であるから、発作波の初発部位によって、精神・自律・神経症状など、初発症状は多彩だが、やがて海馬に発作発射が生じると、間脳と大脳基底核に伝播して発作自動症へ進展する」と、発作症状の多様性を分析された。この講義が、「脳の構造と機能」ということに、私が興味を持つ契機になった。

入局して講義係を務めるようになると、実は先生ご自身もこの話がお好きだということが分かった。講義の前日には綿密に準備をされるのに、当日、話がたまたま側頭葉に及ぶと、よく「あのスライドはありますか？」と、てんかん症候論へ脱線された。初めは医局に走って取りに行っていたが、そのスライドはいつも白衣の左胸のポケットに入れて置くようになった。先生の側頭葉切除術の助手を務めながら、手術のポイントを教えて頂き、そろそろ自分でも出来るかなと思っていた矢先に大学紛争となり、てんかん外科の長い冬が始まってしまった。

1970 年石島武一先生の後任として、Johns Hopkins 大学の A. Earl Walker 教授の下へ留学させて頂いた。「アルミナクリーム法によるサル側頭葉てんかん」というテーマを頂いた時は、あのスライドの理論が実証できるのではないかと、喜んで実験に取り掛かった。しかし、側頭葉は前頭葉よりアルミナへの感受性が低く、焦点形成に数ヶ月かかることが分かり、サルはてんかんになる前に髄膜炎や脳膿瘍になってしまう。Walker 先生は数ヶ月の世界講演旅行で留守、暗澹とした気分を晴らそうと、Washington DC での米国 EEG 学会に参加してみたところ、偶然、ジュン・A・和田先生にお会いした。先生は、初対面の私の躁言を熱心に聴いて下さり、「深部電極が多いので、どこかに髄液漏ができて感染源になっているのではないか、頭蓋骨を完全に乾かしてレジンで固めるように」という示唆を下さった。そして、最後に「君の若さでは、今やっている実験の本当の面白さは、未だ分からないだろう。やがて、それが分かる日が来ることを信じて、頑張りなさい」と言って下さった。この言葉は、人生のさまざまな局面で頭をよぎることが多い。和田先生は当時 50 歳位でいらっしやっただろうか、この年になって、益々、その言葉の重さを思う。生理食塩水・アルコール・エーテルで頭蓋骨を乾燥させたところ感染はなくなり、続く 10 頭全例から計 112 回の発作が記録されて、発作の伝播経路を解明することができた。この研究で後に、日本でてんかん学会のジュン・A・和田賞を頂いたときは、有難いご縁を感じた。

この実験を始めるとき、私には一つの野心があった。それは、側頭葉てんかんの全般化の機序が解明できるのではないかと、“Centrencephalic Structure”のどこかに Generalization の Trigger Zone が発見できるのではないかと、という夢である。確かに、側頭葉皮質あるいは内側部の扁桃核・海馬に初発した発作発射が間脳・大脳基底核に伝播すると、サルは無反応になって自動症に入ることは証明できた。しかし、その段階から全般化への進展を先導するセンターは、中脳のレベルまでには見出せなかった。「全般化は大脳皮質の領域と皮質下構造との発射が呼応するようにして進展する連鎖反応の結果として起きる」という結論になった。Walker 先生に「Centrencephalic theory はどうですか？」と尋ねると、「attractive だが、evidence が無い」と、少し厳しい顔をされた。

Walker 先生は一般に冷厳な人と思われることが多い。ある記念のパーティーでレジデント達が描いた「Walker 教授の脳」には、前頭葉・視床・海馬が極めて大きく、視床下部は存在しなかった。確かに仕事ぶりは厳しく速かった。「His desk was always clean when he left his small office, usually during the late evening hours.」と同僚の Udvarhelyi 教授が記している通りだった。しかし、合理主義的に見えても、私にはとても深く温かい人に見えた。Walker 先生は、中田瑞穂・荒木千里・佐野圭司など諸先生方と長い親交があり、近くは Uematsu Sumio・石島武一の両先生とよい師弟関係にあったためかも知れない。

一晩に 10 回の自発発作を記録したことがあった。翌朝、Walker 先生に一通り説明し、最後に一番きれいな脳波のページに戻ったところ、いつの間にか、そこに鉛筆が挟まっていた。先生は鉛筆を拾い上げながら、驚いている私にウインクを一つして、大きく笑いながらラボを出て行かれた。

Walker 先生の妹さんにお会いしたことがある。長く女学校の教師をされたという、やはり聡明な方だった。石島先生が「Walker 先生は、どんな少年でしたか」と尋ねると、「He was preparing always.」と答えられたので、思わず 3 人で大笑いになった。何時だったか「カナダの冬は厳しいので、カナダ人はいつも worst possibility を考える習性がある」といわれたが、いかにも用意周到で慎重な先生らしいと思った。また、ある時「カナダでは、赤ん坊が生まれると、スケート靴を履かせて氷の上に立つ練習をさせる。だから春が来てスケートを脱ぐと皆すぐに歩き始める」と聞いて成る程と思っていたが、どうやらこれは自作の冗談だったらしい。Walker 先生は、112 回の発作記録すべてを連続写真にとり「いつか暇になったらゆっくり見直してみよう、時が経てば新しく見えてくるものがある」といわれたが、その機会が無かったのは残念である。

恩師には「脳の形態と機能」という玄妙なテーマを教えて頂き、私はその回りを長い年月うろついていたようである。